伝冷泉為秀筆物語切の書写内容

――付・中世『源氏物語』梗概本古筆切集成　補訂版――

中葉芳子

はじめに

『汲古』第六六号に、野中直之氏により「伝冷泉為秀筆未詳物語断簡考――『夜の寝覚』の中間欠巻部分の可能性について[1]――」と題する論文が掲載された。この伝冷泉為秀筆未詳物語断簡というのは、『古筆学大成[2]』第二十四巻に伝冷泉為秀筆夜の寝覚切として掲載されている断簡を指す。この断簡に関して野中氏は御論の中で、「田中登氏によって、伝冷泉為秀筆切に対して慎重な見解が示された後は、断簡の存在自体に触れられることはあっても、論じられる段階にまで発展することはなかった」とされる。

しかし、稿者はすでにこの伝冷泉為秀筆切に関して、その内容が『夜の寝覚』ではなく『源氏物語』梗概本であることを論証している[3]。ただ、『源氏物語』梗概本の古筆切に関する論の中で触れたのみであるので、目には留まらなかったようだ。

そこで、この伝冷泉為秀筆切のツレが紹介されたこの機会に、その内容が『夜の寝覚』ではなく『源氏物語』梗概本であることを改めて論証し、『源氏物語』梗概本であると認定することがツレの内容とも矛盾しないことを確認しておきたい。

一　伝冷泉為秀筆切は『源氏物語』梗概本切である

先に述べたように、当該切は、『古筆学大成』において「夜の寝覚切」として紹介されているものである。まず翻刻を掲げる。

【資料一】『古筆学大成』第二十四巻　図版65

1　はてぬるよにてましらい給はす
2　いと、かすかにてをはすとしころ
3　のきたのかた大臣の御女にて
4　をはしけるひめきみ二人う
5　みをきてかくれたまひぬれは
6　いとひろくをもしろき宮のうち
7　いたくあれぬけはいけやまのこ

この切に関して、『古筆学大成』の解説で小松茂美氏は、「本文は、現存本の『夜の寝覚』の巻第一の発端部分。ただし、その本文は著しい異文を示している」として、『夜の寝覚』の伝本である島原松平文庫本と比較され、「類似の本文はわずかな部分にすぎない」とされながらも、「『夜の寝覚』の巻頭部分に該当することは、まぎれもない」と断じておられる。続けて、

現存本がいずれも江戸時代の書写本であるのに対して、これは十四世紀前半のころにまでさかのぼる伝本であり、当時に通行していた『夜の寝覚』と推知できる本文を伝えるものである。わずか七行分の本文ながら、現存本との比較によって、『夜の寝覚』を根本的に再考すべき問題を孕むものかも知れない。

とも述べておられる。そこで現存本『夜の寝覚』の該当箇所を見てみると、

そのもとの根ざしを尋ぬれば、そのころ太政大臣ときこゆるは、朱雀院の御はらからの源氏になりたまへりしになむありける。琴笛の道にも、文のかたにも、すぐれて、いとかしこくものしたまひけれど、女御腹にて、はかばかしき御後見もなかりければ、なかなかただ人にておほやけの御後見とおぼしおきてけるなるべし、その本意ありて、いとやむことなきおほえにものしたまふ。北の方、一所は按察使大納言の女、そこに男二人ものしたまふ。帥の宮の御女の腹には、女二人おはしけり。形見どもをうらやみなくとどめおきて、競ひかくれたまひにし後、世を憂きものに懲りはてて、いと広くおもしろき宮にひとり住みにて、男女君たちをも、みな一つに迎へ寄せて、世のつねにおぼしうつろふ御心も絶えて、一人の御羽の下に四所を育みたてまつりたまひつゝ[4]

とある。そこで、伝冷泉為秀筆切と現存本『夜の寝覚』の内容とを比べてみると、現存本『夜の寝覚』では二人の妻がいて、一人は男二人、もう一人は女二人を産んで死んだ後、新たな妻も迎えず子供たちを同じ邸に迎え育てた、とある。しかし伝冷泉為秀筆切では世間と交際せずにいたところ、妻は姫君二人を産んで死んだので邸が荒れた、となり、類似というには厳しい。また、姫君（女）二人を産んだ妻に関しても、現存本『夜の寝覚』では帥の宮の娘だが、伝冷泉為秀筆切では大臣の娘であり、これも類似しているとするには疑問が残る。要するに、二人の娘を産んだ北の方が死んだ、という共通点しかないのである。これでは伝冷泉為秀筆切が『夜の寝覚』であるとは言い切れず、同様の人物関係がある他の作品（散逸物語を含む）の可能性は残る。

それでは、この伝冷泉為秀筆切はどのように考えればよいのであろうか。ここで注目したいのが、伝後花園天皇勾当内侍筆源氏物語梗概本切である。拙論ですでに論証をおこなっているが、改めて述べる。

【資料二】『古筆学大成』第二十三巻　図版370

1　よこさまにおはしかまへてけ色を世中
2　にたちつき給へてわか御子にしても
3　とてかしつき給けるさはきになりはて
4　ぬる世にてましろひ給はすいとかすかに
5　をはすとしころの北のかたは大臣の御む
6　すめにてをはしける姫君二人うみを
7　きてかくれ給ぬれはいとひろくおも
8　しろき宮のうちいたくあれゆけは
9　池山の木たちうちなかめて姫君に
10　ひは中の君にしやうの事ならはして
11　経をかたてにもちてかつよみつゝしやう

内容は、『源氏物語』橋姫巻の冒頭近くに該当する。源氏の須磨退去後、朱雀帝の母である弘徽殿大后の企みによって、当時東宮であった冷泉帝の代わりに、宇治の八宮が東宮に据えられそうになった。そのため源氏の政界復帰後、八宮は世間との交際もなくなり、妻亡き後は邸も荒れ果てる中で、仏道修行をしながら、娘二人に箏や琵琶などを教えて暮らしていることがまとめられている。『源氏物語大成』[5]では一五〇七頁5行目～一五一三頁11行目あたりに該当する内容である。この伝後花園天皇勾当内侍筆源氏物語梗概本切は、『源氏物語』本文を梗概作成者の

言葉で言い替えており、梗概化された文章は、『源氏物語』本文とは描かれる順序も表現も異なる。しかし、『源氏物語』橋姫巻を梗概化したものであることはツレを勘案しても間違いない。

この伝後花園天皇勾当内侍筆源氏物語梗概本切と伝冷泉為秀筆切とを比べてみると、伝冷泉為秀筆切は、伝後花園天皇勾当内侍筆源氏物語梗概本切の3行目後半から9行目前半までと一致する。このことから考えると、この伝冷泉為秀筆夜の寝覚切と『古筆学大成』で紹介されている断簡は、『源氏物語』梗概本の古筆切だと言える。

これら二枚の断簡の間には、書写の際の誤りかと考えられるようなわずかな異同はあるが、内容、表現などは一致している。表記の違いがあるため、直接の書承関係にはないかもしれないが、同一梗概本の、異なる写本の断簡同士なのではないだろうか。

伝冷泉為秀筆切だけからではわかることが限られており、どの作品のどのような写本の断簡であるのかは特定できなかった。しかし、この伝後花園天皇勾当内侍筆源氏物語梗概本切を通して見てみると、伝冷泉為秀筆切は、『古筆学大成』が述べるような『夜の寝覚』の古筆切ではなく、『源氏物語』梗概本の古筆切であり、橋姫巻を梗概化したものであると言える。

なお、この伝後花園天皇勾当内侍筆切については、原豊二氏がすでにツレを含めた三枚の断簡を用いて考察されており、[6]「古注釈書の影響を受けつつ、理解の便のために『源氏物語』の本文にはないものも適宜組み入れている」ことを検証されている。

二　伝冷泉為秀筆切の新出断簡の考察

まず、新出断簡が『古筆学大成』に紹介されている伝冷泉為秀筆切とツレであるかどうかを、書誌事項から確認してみる。新出断簡は縦一五・六センチ、横一六・三センチの六半切。一面の行数は九行である。それに対して『古筆学大成』所収の伝冷泉為秀筆切は、縦一五・三センチ、横一一・五センチ。一面の行数は七行である。横幅と行数が異なるが、『古筆学大成』所収の伝冷泉為秀筆切が二行切り取られていると考えれば、大きさ、書写形式からはツレであることを妨げない。伝称筆者も同じであり、筆跡に関しても同筆としてよいと思われることから、両者はツレであると認定できる。

次に内容の考察に移る。今回紹介されたツレの断簡の翻刻を掲げる。

【資料三】『大東文化大学所蔵　貴重書跡図録目録Ⅰ』[7] 52

1　てきよひ返給ひぬれはひめ君たち
2　の御もとにはなか〳〵ちかきほとにを
3　はしてつれなく返たまひぬるを
4　くちをしくおほしけりにほふ
5　宮御しのひありきを内院朱雀の御こ
6　にもらしそらする人ありて御さ
7　とすみもこゝろにまかせ給はす内
8　にのみ候給ころ御いもうとの女一
9　の宮の御方へまいり給へれは御ゑ

この新出断簡の内容に関して野中氏[8]は「より専門の方に委ねたいところではあるが」と断った上で、

はじめに登場人物であるが、「朱雀院の御こ」および「御いもうとの女一の宮」という語が見られる。『夜の寝覚』では女一の宮は、朱雀院の第一皇女であり、帝の妹にあたるようである。この女一の宮は、このような高貴な身分でありながら、男君に降嫁することになる。そのため、物語が進むにつれて主人公・寝覚の女君は女一の宮に対し、強い劣等感を覚えるようになっていくようである。

また、「ひめ君たちの御もとには」や「しのひありき」、「御いもうとの女一の宮の御方へまいり給へれは」など、女一の宮のもとへ通う様子が見られる。

と読み解かれた。そして、

仮に、これら伝冷泉為秀筆切が『夜の寝覚』だとすると、既出断簡から、異同を多く含む初めての異本として位置づけられるのであろうか。

とも述べられている。その上で、

しかしながら、伝後光厳院筆切の際に田中氏が「末尾欠巻部に関する」云々と指摘された通り、現段階ではこの伝冷泉為秀筆切を『夜の寝覚』の断簡と結論づけることはさけるべきであろう。

と結論を先送りしておられる。

その後、この野中氏の論文を承けて『書道学論集12』所収の

「大東文化大学所蔵日本書跡解題　古筆手鑑」[9]の中でも、「本断簡の書写内容は『夜の寝覚』のうち未詳の中間欠巻部の写本であろうか」との〔補考〕が記されている。

しかし、この新出断簡には4～5行目に「にほふ宮」という人物呼称が用いられている。「にほふ宮」とは『源氏物語』に登場する、宇治十帖の主要人物である。このことからも、先に考察した『古筆学大成』所収の切と同様、新出断簡が『源氏物語』の梗概本を内容とすることに矛盾はないが、確認のために詳しく新出断簡の内容を見てみる。

まず、6～9行目にある、里住み（匂宮の邸は二条院）をも許されず宮中に滞在することを余儀なくされた「にほふ宮」が「御いもうとの女一の宮」の所に行くと絵をご覧になっている時であった、という記述である。これは総角巻に見える、匂宮と女一宮が『伊勢物語』の絵を見て歌のやり取りをする場面に相当すると考えられる。『源氏物語大成』で一六四三頁13行目から始まる場面である。女一宮と匂宮とは同母の姉弟であるので、「御いもうとの」とある人物呼称にも矛盾しない。ただ、ここが場面の始まりの箇所であるため、この後の展開はわからない。しかし、この伝冷泉為秀筆切の内容を明らかにするために前節で用いた、伝後花園天皇勾当内侍筆源氏物語梗概本切の梗概化の方法から考えると、注釈的な記述を取り入れていることが想定できる。この場面では『伊勢物語』八十四段を踏まえた歌のやり取りがなされていることや古注釈書での『篁物語』の指摘から、この新出断簡に続く場面には、『伊勢物語』八十四段や『篁物語』を注釈的に取り込んでいるのではないか、との期待もある。

次に、1～6行目にある「にほふ宮」が姫君たちに会えずに帰るのを残念がる様子と、その忍び歩きを咎められた、との記述は先ほど述べた総角巻の場面の前に見られる。宇治の中君と結婚した匂宮だが、周りの監視から宇治への訪れが途絶えがちになっている。そこで、紅葉狩にかこつけて宇治を訪れ中君に逢おうとしたが、母明石中宮の知るところとなり大勢の迎えが来たことで逢えずに帰ることになった場面と、都に帰った匂宮に対して、父今上帝が咎める場面である。

ここで興味深いのは、「にほふ宮」の忍び歩きを咎めた人物を「内朱雀院の御こ」と説明していることである。先に述べたように、この人物は匂宮の父である今上帝であるはずだ。しかし、宇治十帖で「内」と言えば今上帝を指すはずであるのに、この新出断簡では、「内」を今上帝の父朱雀院と注している。朱雀院は物語中にその死が語られることはないが、すでに世を去っている

と想定される。また朱雀院の次には冷泉院も位についている。それなのに今上帝は朱雀院の皇子であると説明されているのである。ツレも少ない断簡であるため即断はできないが、今上帝が即位後この梗概本に登場したのは、この場面が初めてだったのではあるまいか。そのため、「にほふ宮」の忍び歩きを咎めた人物、つまり匂宮の父である今上帝を説明するのに、第一・二部に登場し読者にも周知の人物である朱雀院の皇子なのだ、と記したと考えられる。

ツレがさらに紹介されれば、この梗概本の全容も明らかになってくるであろう。その際には、人物呼称に関して改めて考察してみたい。

さらに言えば、伝後花園天皇勾当内侍筆源氏物語梗概本切と伝冷泉為秀筆切、これら二種類の古筆切のツレがともに多数見い出されれば、より詳しく梗概本の内容や梗概化の方法、人物呼称がわかってくるであろう。そうなることを期待したい。

おわりに

これまで述べてきたように、『古筆学大成』に伝冷泉為秀筆夜の寝覚切として紹介されている古筆切は、『夜の寝覚』ではなく『源氏物語』梗概本の古筆切であり、ツレとして紹介された大東文化大学に所蔵される新出断簡もまた『源氏物語』梗概本として矛盾のない内容であった。欠巻部のある『夜の寝覚』の断簡であり失われた内容が復元できる資料であれば喜ばしいのは確かであるが、残念ながらそうではなかった。

しかし、『源氏物語』梗概本としても、この伝冷泉為秀筆切とそれと同じ内容を持つ伝後花園天皇勾当内侍筆源氏物語梗概本切には他の梗概本には見られない注釈的な記述がなされている。『源氏物語』梗概本が『源氏物語』本文を梗概化するだけでは飽き足らず、注釈など『源氏物語』本文にはないものをも取り込んでいった時代に作成されたのであろう。こうした梗概化の方法は、連歌師たちの「中世源氏物語の世界」とも関連するのではないかとの想像も広がる。中世の『源氏物語』享受を明らかにするという意味でも、重要な内容を持つ古筆切である。

伝後伏見天皇筆切（鎌倉時代後期書写）

	巻　名	図版掲載書籍など	大きさ	行　数	『大成』行数	備　考
1	桐壺巻	平成17年古典籍展観大入札会目録　5		7行	5①～⑦	
2	桐壺巻	古筆学大成第23巻　図版357	25.5×16.5	7行	27⑤～28⑤	
3	末摘花巻	大東文化大学蔵貴重書跡図書目録Ⅰ　15	25.4×16.7	8行	223⑥～224⑨	
4	賢木巻	源氏物語千年のかがやき〔21〕①	26.0×17.1	8行	354⑩～356④	
5	賢木巻	中尾松泉堂書店創業百周年記念古典籍展示即売会目録　6-⑦	25.8×16.9	8行	364④～⑩	極札「伏見院」
6	花散里巻	源氏物語断簡集成　第1部　57	25.7×16.9	8行	389③～⑦	『古筆学大成』釈文
7	須磨巻	源氏物語断簡集成　第1部　58	25.5×14.8	7行	401②～⑥	
8	須磨巻	古筆学大成第23巻　図版347		8行	435②～⑥	
9	須磨巻	国文学古筆切入門　85	25.6×14.3	7行	435⑪～436⑤	
10	松風巻	古筆学大成第23巻　図版348	25.6×16.8	8行	584③～⑦	
11	松風巻	源氏物語断簡集成　第1部　59	25.6×12.8	6行	584⑧～586⑥	
12	松風巻	書画　蒐集と鑑賞　2号 -37	26×17	8行	590⑫～591③	
13	松風巻	成城大学所蔵古筆手鑑「もゝちどり」6		8行	591③～⑨	
14	松風巻	古筆学大成第23巻　図版349		4行	595③～⑥	
15	朝顔巻	古筆学大成第23巻　図版358		8行	644⑤～645⑨	
16	朝顔巻	古筆学大成第23巻　図版359		8行	657⑦～⑪	
17	玉鬘巻	人物で読む『源氏物語』13巻	24.6×13.1	7行	743⑧～745②	
18	初音巻	平成新修古筆資料集　第2集　5	25.0×14.1	7行	765⑩～766②	
19	胡蝶巻	人物で読む『源氏物語』3巻		3行	782④～⑥	
20	胡蝶巻	古筆学大成第23巻　図版350		8行	790⑧～⑬	
21	常夏巻	古筆学大成第23巻　図版351		6行	836③～⑥	
22	篝火巻	古筆学大成第23巻　図版205	25.6×12.1	6行	856⑪～⑭	
23	行幸巻	古筆学大成第23巻　図版352		8行	886⑧～887⑩	

24	行幸巻	平成新修古筆資料集　第1集　4	25.6×16.5	8行	888⑪～889⑦	
25	行幸巻	出光美術館蔵品図録　書　2-20	24.8×16.3	8行	895⑭～896⑫	
26	藤裏葉巻	中尾松泉堂書店創業百周年記念古典籍展示即売会目録　6-⑧	25.2×8.4	4行	997①～③	
27	藤裏葉巻	古筆学大成第23巻　図版353	25.6×16.4	8行	1004⑤～⑩	『古筆手鑑大成13』
28	藤裏葉巻	古筆学大成第23巻　図版360	25.5×16.5	8行	1015①～⑪	『徳川黎明会叢書　玉海』
29	柏木巻	源氏物語断簡集成　第1部　60	25.4×16.4	8行	1232⑩～1233⑦	
30	柏木巻	古筆学大成第23巻　図版354		8行	1253①～1255⑧	
31	夕霧巻	金刀比羅宮蔵手鑑古今筆陳		8行	1313⑫～1314③	
32	夕霧巻	男爵神田家及某大家所蔵品入札目録-46		8行	1314③～⑨	
33	夕霧巻	古筆学大成第23巻　図版355		7行	1373⑨～⑬	
34	御法巻	古筆学大成第23巻　図版361	25.5×15.9	8行	1383⑬～1384⑤	『人物で読む『源氏物語』15巻』
35	御法巻	古筆学大成第23巻　図版356		7行	1393⑧～1394③	

伝二条為明筆切（鎌倉時代後期書写）

1	薄雲巻	古筆学大成第23巻　図版363		11行	607⑪～608②	
2	薄雲巻	古筆学大成第23巻　図版364		11行	611⑩～615⑤	
3	玉鬘～初音巻	筆林　表-24	16.4×15.8	10行	757①～764④	
4	初音巻	平成新修古筆資料集　第2集　90	16.9×15.9	12行	764④～⑩	
5	蛍巻	古筆学大成第23巻　図版365		12行	813⑪～815②	
6	蛍巻	平成新修古筆資料集　第4集　93	16.5×15.7	12行	815③～816⑥	
7	篝火巻	源氏物語断簡集成　第1部　68	16.9×16.0	12行	856⑬～857⑨	
8	真木柱巻	古筆学大成第23巻　図版366	16.6×15.8	12行	947⑫～948⑩	『古筆手鑑大成13』
9	梅枝巻	九州大学蔵手鑑「汲古帖」	16.7×15.4	12行	980①～981④	
10	梅枝巻		16.7×12.9	10行	985⑬～986⑪	
11	藤裏葉巻	京都古典籍・古書画資料目録　1号-174	17×16	12行	1005①～1008⑫	

伝冷泉為秀筆（鎌倉後期～南北朝期書写）

	巻　名	図版掲載書籍など	大きさ	行　数	備　考
1	橋姫巻	古筆学大成第24巻　図版65	15.3×11.5	7行	古筆学大成では「夜の寝覚切」
2	総角巻	大東文化大学蔵　貴重書跡図録目録Ⅰ　52	15.6×16.3	9行	

伝後花園天皇勾当内侍筆（室町時代初期書写）

1	藤袴巻	人物で読む『源氏物語』16巻		12行	極札「後土御門院勾当内侍」
2	橋姫巻	古筆学大成第23巻　図版370	16.0×15.0	11行	六半切
3	橋姫巻	原豊二『源氏物語と王朝文化誌史』	16.0×14.0	11行	
4	浮舟巻	池田和臣「源氏物語注釈書・梗概書の古筆切」	15.3×14.5	11行	

伝西行筆（鎌倉時代前期書写）

1	若紫巻	古筆学大成第23巻　図版340		12行	六半切

伝西行筆（鎌倉時代前期書写）

1	若紫巻	昭和63年東京古典籍下見展観大入札会目録835		9行	

伝後京極良経筆（鎌倉時代前期書写）

1	御法巻	古筆学大成第23巻　図版342		5行	

伝藤原家隆筆（鎌倉時代前期書写）

1	橋姫巻	平成2年東京古典籍下見展観大入札会目録57		10行	

伝慈円筆切（鎌倉時代前期書写）

1	若菜上巻	古筆学大成第23巻　図版344	16.7×15.7	13行	六半切
2	若菜上巻	高城弘一蔵			未見（小林強氏による）

伝源頼政筆（鎌倉時代中期書写）

1	柏木巻	鈴木一雄「源氏物語梗概書の古筆断簡」	15.5×14.8	10行	六半切

伝藤原為家筆切（鎌倉時代中期書写）

1	葵巻	人物で読む『源氏物語』7巻　口絵		10行	
2	薄雲巻	曽田文雄氏所蔵「源氏物語略本切」について	14.7×14.7	11行	六半切

伝二条為氏筆切（鎌倉時代後期書写）

1	若菜下巻	国文学古筆切入門　84	15.7×16.9	11行	六半切
2	夕霧巻	潮音堂書蹟典籍目録　第１号-53	15.5×15.7	11行	極札「津守国夏」

伝吉田兼好筆（鎌倉時代後期書写）

1	宿木巻	古筆学大成第23巻　図版362		５行	

伝称筆者不明（南北朝期書写）

1	早蕨巻	平成4年明治古典会七夕大入札会目録　2242		11行	

伝下冷泉持為筆（室町時代初期書写）

1	梅枝巻	藤井隆「源氏・狭衣の古筆切について」		９行	四半切

伝後土御門天皇勾当内侍筆（室町時代中期書写）

1	帚木巻	源氏物語断簡集成　79図	13.5×6.0	３行	

伝猪苗代兼載筆（室町時代中期書写）

1	総角巻	徳川美術館蔵　手鑑「藁叢」人36	26.3×15.1	９行	
2	夢浮橋巻	金刀比羅宮蔵　手鑑「古今筆陳」		11行	

伝正般（正徹門弟）筆（室町時代中期書写）

1	藤裏葉巻	小林強氏蔵			未見（小林強氏による）

伝称筆者不明（室町時代中期書写）

1	胡蝶巻	小津家古筆切聚影　50	16.9×14.0	10行	

注

（1）野中直之「伝冷泉為秀筆未詳物語断簡考――『夜の寝覚』の中間欠巻部の可能性について――」（『汲古』第六六号、平成二十六年十二月、汲古書店）

（2）『古筆学大成』講談社

（3）拙稿「中世における『源氏物語』梗概本の古筆切」（『国文学（関西大学）』第九十六号、平成二十四年三月）、同「中世『源氏物語』梗概本古筆切集成稿」（『関西大学東西学術研究所　研究報告書　東アジアの中の日本文化』、平成二十六年三月）

（4）『新編日本古典文学全集　夜の寝覚』（底本　島原図書館松平文庫本）による。

（5）池田亀鑑編著『源氏物語大成』中央公論社

（6）原豊二「新出物語切について」（『源氏物語と王朝文化誌史』勉誠出版、平成十八年三月）

（7）『大東文化大学蔵　貴重書跡図録目録Ⅰ』（大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻、平成二十三年三月）

（8）野中氏の御論は、前掲注（1）論文による。

（9）「大東文化大学所蔵日本書跡解題（監修　髙城弘一）古筆手鑑」（『書道学論集12』大東文化大学大学院書道学専攻院生会誌、平成二十七年三月）。なお、当該断簡の解題分担執筆者は西片由貴氏である。

付録の表は、以前「中世『源氏物語』梗概本古筆切集成稿」（『関西大学東西学術研究所　研究報告書　東アジアの中の日本文化』、平成二十六年三月）に掲載したものを、その後、管見に入ったものを追加するなどして補訂したものである。

（なかば　よしこ／本学非常勤講師）